



Mobile World Congress 2011 スマートフォンはAndroid主役 次世代通信をにらんだ展示も

世界最大のモバイル関連イベントがスペインのバルセロナで2月14～17日の4日間開催された。スマートフォンはAndroidの時代となり、LTEなど次世代通信の実用化が展示の大きなテーマだった。 文 山根康宏(携帯電話研究者)

今年もGSM Association(GSMA)主催による世界最大のモバイル関連イベント「Mobile World Congress 2011」が2月14～17日の4日間、スペイン・バルセロナのバルセロナ国際展示会場で開催された。

スマートフォンの世界的な流行に加えて、次世代通信規格の商用化が各国で始まるなか、来場者数は昨年比約120%となる6万300人に達し、過去最高を記録した。また、アプリケーション開発関連企業を集めた専門ホール「App Planet」が開設されるなど、展示内容も広がりを見せた。

MSブースは来訪者増

会場内で目立ったのが、各端末ベンダーを中心としたスマートフォンやタブレット端末の展示だ。フィーチャーフォンやベーシック端末の展示は少なく、業界全体がスマートフォンを中心としたビジネスモデルの構築を図っていく動きが活発化しているようである。

そしてスマートフォンはAndroid OSを採用した製品が展示の主力となっており、ノキアが採用するSymbian製品の展示は昨年と比べて急激に減少していた。マーケット

シェアではノキアがまだ世界の座をキープしているが、スマートフォンではAndroidに抜かれた状況が本イベントから見えてくるようだ。

さて、今年も最大規模のブースを出展していたサムスン電子は、本イベントに合わせて発表した「Galaxy S II」や「Galaxy Tab 10.1」といった新製品を中心にGalaxyシリーズでブース内を埋め尽くしていた。画面サイズを大きくしたWiFi版や小型サイズといった派生モデルも展示しており、同社の主力製品ラインナップはAndroid中心に完全移行している。

ライバルのLG電子は3D対応スマートフォンや8.9インチのタブレット端末を発表。どちらも3D撮影に対応するなどして差別化を図っているが、豊富な製品層を誇るサムスン電子との差は埋めきれない印象を受けた。同社はスマートフォン戦略で若干出遅れたが、Android製品にOptimusのブランドをつけて巻き返しを図っているところである。

一方、スマートフォン専門ベンダーであるHTCは6機種もの新製品を発表した。デザイン端末や「Facebook」とのコラボレーション端末などスマートフォンブームに乗って製品バリエーションを着々と増やしている。特にタブレット端末「Flyer」は付属のスタイラスペンで操作を書き込み指示できるといった新しい操作体系を搭載し、他社と差別化を図っている。

さらにはソニー・エリクソンがスライド型でゲームパッドを内蔵した「Xperia Play」やQWERTYキーボードを搭載した「同 Pro」、中国のインフラベンダーであるファーウェイと